

OITA
UNIVERSITY

75th
ANNIVERSARY

大分大学
75年史

1949



2024



2003統合



大分大学

OITA UNIVERSITY

75年史

75th ANNIVERSARY BOOK

OITA UNIVERSITY

大分大学学章



OITA UNIVERSITY

作者：神保 米雄 氏（グラフィックデザイナー／千葉県松戸市在住）

「OITA」と「UNIVERSITY」の頭文字「O」「U」をモチーフに、躍動感あふれる2つの円でデザインした新しい大分大学の学章（シンボルマーク）です。

外側の円（青色）は、教育、福祉、医療、環境、産業経済、科学技術など新しい大分大学の研究・専攻分野が、常に新しいものを目指し、止まることなく前進し続け、地域の発展、さらには国際社会の発展に貢献するグローバルな様子を表現しています。

中央の円は、人々が集い学び、そして社会的、文化的な交流・活動の場所である大学キャンパスを表現しています。「O」に使用している青色は、知性、誠実、探求心、自立心を表す色とされており、「U」の黄色は、希望、成長、幸福を象徴する色とされています。

両大学の英知を結集し、新しい大学の未来が希望に溢れ、光り輝き、そして発展していくようにとの願いを込めて、この2色を採用しました。

この学章は、旧大分大学と大分医科大学の統合（2003（平成15）年10月）に合わせ、広く一般に公募して定められたものです。

旧大分大学学章



作者：堀江 豊 氏（広島県廿日市市在住）

大分と大学の「大」の文字を「人（学生）」に重ねて、五つのラインで「実学」「人間性」「可能性」「国際性」「開放性」を表すとともに、全体のフォルムで「優しさ」と「豊かさ」「可能性と幅広い視野」「地域社会と国際社会」の無限の広がりをイメージしている。

旧大分医科大学学章



大分の県花（県木）である豊後梅の花をモチーフとし、その八重の花弁をDNAの二重らせんにモディファイしてある。

この二重らせんはまた互いに巻く二匹の蛇、すなわちギリシア神話における医神アスクレピウスの杖を意味し、西洋医学の伝統を示す。

花の中心をOitaのOとし、UniversityのUは聴診器をイメージした活字を選んだ。

大分大学学歌

作詞 蛙屋 萬斎

作曲 道谷 増夫

Moderato (♩=104)



1. は や す い せ と の か せ よ せ る め ぐ み ゆ た か な
2. と お く や ま な み あ お ぎ る み の り ゆ た か な
3. ひ ろ く せ か い に ひ ら か れ た れ き し ゆ た か な



こ の う み は む げ ん の り そ う ふ く ー ら ま
こ の へ い や じ ゆ う の お も い つ よ ー く す
こ の ち に は し ん し ゅ の お が い あ ふ ー れ た



す わ れ ら こ こ に ま な び て は ふ か き え い ち を
る わ れ ら こ こ に ま な び て は そ う ぞ う の き を
り わ れ ら こ こ に ま な び て は そ の こ ころ ざ し



や し な い て み ち ー へ と い ど む も の ー な ら ー
は ぐ く み て じ だ い を み ち び く も の ー な ら ー
う け つ ぎ て せ か い に は ば た く も の ー な ら ー



ん あ あ ー お お い た だ い が く わ れ ー ら あ り 2. と
ん あ あ ー お お い た だ い が く わ れ ー ら あ り 3. ひ
ん あ あ ー お お い た だ い が く わ れ ー ら あ り

三、

二、

一、

ああ 世界に羽ばたく者ならん
その志を受け継ぎて
我らここに学びては
進取の気概溢れたり
歴史の豊かなこの地には
広く世界に開かれた

ああ 時代を導く者ならん
創造の気を育みて
我らここに学びては
自由の想いを強くする
総り豊かなこの平野
遠く山並み仰ぎ見る

ああ 未知へと挑む者ならん
深き叡智を養いて
我らここに学びては
無限の理想膨らます
恵み豊かなこの海は
速吸瀬戸の風寄せる

作詞 蛙屋 萬斎
作曲 道谷 増夫

本学は、旧大分大学と大分医科大学との統合を機に新しい学歌を募集し、2006(平成18)年9月に作詞部門(入選者:蛙屋 萬斎氏)、12月に作曲部門(入選者:道谷 増夫氏)の入選作品を決定し、2007(平成19)年1月に学歌を制定しました。

旧大分大学学歌



三	二	一
命映ゆ 不抜の信念 豊饒の 個性おおく 新生の 聖き理想は 築きゆく 文化の基 夢開く 大分大学 ここに我あり 光彩あり	求めゆく 英知の星座 夢清し 大分大学 ここに意志あり 誓いあり	瞳澄む 希望の朝 風薫る 真理の大地 創造の 光集めて 究めゆく 無辺の思索 夢集う 大分大学 ここに道あり 大志あり

作詞者／能 登 浜 吉 氏 埼玉県所沢市在住

作曲者／久保田 栄子 氏 大分県大分市在住
 (1990(平成2)年教育学部卒業)

旦野原キャンパス

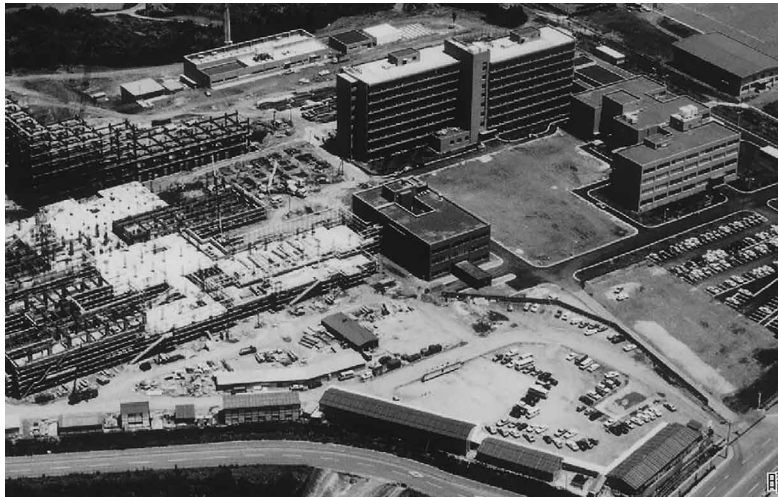


建設が進む旦野原キャンパス(1967(昭和42)年)



旦野原キャンパス(2024(令和6)年)

挟間キャンパス



建設が進む挟間キャンパス(1979(昭和54)年)



挟間キャンパス(2024(令和6)年)

王子キャンパス



附属中学校開校当時の学芸学部全景(1949(昭和24)年頃)



王子キャンパス(2024(令和6)年)

旧大分大学歴代学長



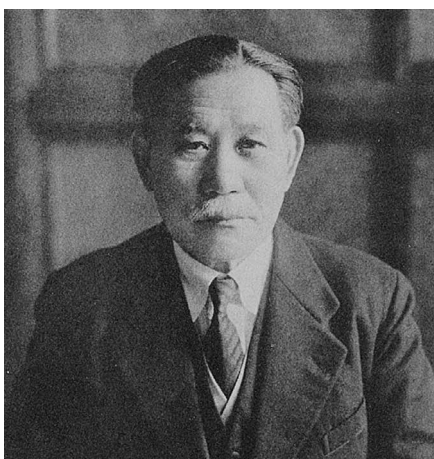
事務取扱 日 下 恒

1949 (昭和 24) 年 5 月 31 日～
1949 (昭和 24) 年 7 月 14 日



初 代 増 井 光 蔵

1949 (昭和 24) 年 7 月 14 日～
1954 (昭和 29) 年 1 月 27 日



2 代 花 田 大 五 郎

1954 (昭和 29) 年 1 月 27 日～
1958 (昭和 33) 年 1 月 27 日



3 代 草 場 勇

1958 (昭和 33) 年 1 月 27 日～
1968 (昭和 43) 年 1 月 26 日



4 代 後 藤 正 夫

1968 (昭和 43) 年 1 月 27 日～
1976 (昭和 51) 年 1 月 26 日



5 代 中 村 末 男

1976 (昭和 51) 年 1 月 27 日～
1982 (昭和 57) 年 1 月 26 日



6 代 釘 宮 保 雄

1982 (昭和 57) 年 1 月 27 日～
1986 (昭和 61) 年 1 月 26 日



7 代 志 賀 史 光

1986 (昭和 61) 年 1 月 27 日～
1990 (平成 2) 年 1 月 26 日



8 代 光 永 公 一

1990 (平成 2) 年 1 月 27 日～
1994 (平成 6) 年 1 月 26 日



9 代 野 村 新

1994 (平成 6) 年 1 月 27 日～
2002 (平成 14) 年 1 月 26 日



10 代 内 藤 喜 之

2002 (平成 14) 年 1 月 27 日～
2003 (平成 15) 年 9 月 30 日

大分医科大学歴代学長



初代 中塚 正行

1976 (昭和 51) 年 10 月 1 日～
1982 (昭和 57) 年 9 月 8 日



2代 中村 家政

1982 (昭和 57) 年 9 月 8 日～
1986 (昭和 61) 年 3 月 31 日
(事務取扱含む)



3代 糸賀 敬

1986 (昭和 61) 年 4 月 1 日～
1992 (平成 4) 年 3 月 31 日



4代 高木 良三郎

1992 (平成 4) 年 4 月 1 日～
1998 (平成 10) 年 3 月 31 日



5代 中山 巖

1998 (平成 10) 年 4 月 1 日～
2003 (平成 15) 年 9 月 30 日

大分大学歴代学長



初代 中山 巖

2003（平成15）年10月1日～
2005（平成17）年9月30日



2代 羽野 忠

2005（平成17）年10月1日～
2011（平成23）年9月30日



3代 北野 正剛

2011（平成23）年10月1日～

刊行にあたって

大分大学長

北野 正剛



2024（令和6）年5月、大分大学は創立75周年を迎えました。これまで本学を支えてくださった皆様に、心から感謝申し上げます。

この「大分大学75年史」では、2003（平成15）年3月に発行した「大分大学50年史」中に開学に至るまでの状況からの50年間の詳細に綴られていることを踏まえ、主にその後の25年間について綴ることとしております。

この25年間の出来事を振り返ってみますと、国立大学を取り巻く環境は大きく変化しました。そのような中、本学にとって大きなインパクトがあった出来事は、大分大学と大分医科大学の統合、新型コロナウイルス感染症への対応があげられるのではないのでしょうか。

2003（平成15）年10月の大分大学と大分医科大学の統合は、教育・研究の質の向上と大学運営の効率化を目指して行われました。組織文化の違いや物理的なキャンパス間の距離などの課題もありましたが、両大学の統合なくして、今日の大分大学の発展はありません。

そして、今も記憶に新しい、2019（令和元）年以降、世界的な流行をみせた新型コロナウイルス感染症への対応では、キャンパスの姿が一変したものの、オンライン授業の普及など新たな学びの方法が生まれる契機ともなりました。

その後も、社会環境の変化は目まぐるしいものがあり、少子高齢化の進行、グローバル人材の育成や地域連携への対応など大学に対する社会からの期待の高まりを感じています。

私は、1993（平成5）年、縁あって大分医科大学に着任し、2011（平成23）年10月に大分大学の学長に就任しました。当時、大学の機能強化が喫緊の課題となっており、大学改革は避けて通れない状況となっておりました。私は、

医師として、1990（平成2）年に西日本初となる腹腔鏡による胆のう摘出に成功、1991（平成3）年に世界初となる腹腔鏡による胃切除に成功するなど、新たな道を切り拓いてきた経験を活かし、就任以来、「改革なき大学に明日はない」の信念の下、今、本学は何をすべきか、どうすることが最善かということを考え、本学の改革に努めてまいりました。工学部の設置（1972（昭和47）年）以来44年ぶりとなる福祉健康科学部の新設（2016（平成28）年）をはじめ、医学部における新たな学科として先進医療科学科の設置（2023（令和5）年）、現代の社会が必要としているDX人材の養成を目的に理工学部にてDX人材育成基盤プログラムを新設（2024（令和6）年）するなど様々な改革を行ってきました。

また、本学が主導して東京大学、京都大学を含む全国14大学（35大学：2024（令和6）年5月現在）をまとめたアジア内視鏡人材育成支援大学コンソーシアムなどを設立、厚生労働省及び経済産業省の国際展開プログラムと連携の下、アジアにおける内視鏡指導を通して、本学の国際化に寄与してきました。

大分における地（知）の拠点として、本学がもつ特色や強みを活かしながら、イノベーションの創出、地域・社会が求める人材養成の役割を果たすとともに、グローバルな視点も備えながら、持続可能な社会の核となる大学として、地域社会から厚い信頼を得ることができるよう、これからも歩みを止めることはありません。

この先の100周年、またその先、本学がどのように変化し、どのような進化を遂げているのか、是非、ご期待いただきたいと思います。

大分大学創立 75 周年にあたって

大分県知事

佐藤 樹一郎



大分大学の創立75周年を心からお慶び申し上げます。

北野学長をはじめ、長年にわたり大学の礎を築かれ、発展に尽力されてきた歴代の関係者の皆様に謹んで敬意を表します。また、県政推進にご尽力いただいている皆様、そして多大なるご支援を賜っている卒業生の皆様に、深く感謝申し上げます。

大分大学は、昭和24年に新制大学として発足し、平成15年に旧大分医科大学との合併を経て、国立大学法人を設立されました。その後、各学部の改組や設置、COC+推進機構の設置など、時代の変化に対応しながら、人材育成と教育の充実を図ってこられました。特に地域社会の活性化に積極的に貢献され、数多くの優秀な人材を輩出してきており、多くの卒業生たちが教育、経済、医学、理工学、福祉など幅広い分野で活躍し、本県のみならず日本全体の発展に貢献いただいております。

また、貴学には特に本県と様々な形で連携し、県政推進においても重要な役割を果たしていただいております。

平成30年1月に設置された「減災・復興デザイン教育研究センター（CERD）」と本県は、平成31年2月に災害対策に係る連携に関する協定を締結しました。災害情報活用プラットフォーム（EDiSON）をはじめとする様々な取り組みを通じて、安全で安心な社会の構築のため、災害対応業務の高度化推進等を進めております。

また、令和3年10月に設置された「グローバル感染症研究センター」についても、令和5年12月に本県と連携協力協定を締結し、新興感染症発生時の迅速診断、流行予測のためのゲノ

ム解析等、新興・再興感染症の流行に備えた感染症検査体制の整備について連携を進めてきたほか、令和6年1月に本県が策定した「グリーン・コンビナートおおいた推進構想」においても、GX人材の確保・育成や地域のイノベーション創出といった重要な役割を担っていただいております。

さらに、令和6年9月に、県において新たな長期総合計画「安心・元気・未来創造ビジョン2024～新しいおおいたの共創～」を策定しましたが、策定にあたり北野学長に大分県新長期総合計画策定県民会議の総合調整部会長に就任いただきました。北野学長には、県民や関係団体・企業などからの多様な声や課題の一つひとつに向き合って、計画のとりまとめにご尽力いただきましたことに、改めて感謝申し上げます。

この新たな計画における県の主要施策の1つに大学等との連携強化を位置付けています。大学等が持つ教育機能や研究開発機能を生かして、大分県の将来を支える人材の育成・定着と産業や地域の発展に繋がりたいと考えております。

急速な社会変化の中で、本県が持続可能な発展を遂げるためには、地域のイノベーションを創出し、地域社会の課題解決に貢献できる人材の育成が不可欠です。貴学には、本県における人材育成や学術研究の「知の拠点」として、これからも地域と共に歩む大学として更なる飛躍を期待しています。

結びに、貴学のますますのご発展と、多くの関係者の皆様の更なるご活躍を心より祈念し、お祝いの言葉といたします。

大分大学 75 周年にあたって

大分市長

足立 信也



大分大学の創立75周年を心からお祝い申し上げます。

貴大学におかれましては、昭和24年に新制大学として発足し、平成15年の大分医科大学との統合などを経ながら、地域社会のニーズに応える人材育成を通じて、経済、産業、教育、福祉、医療など、幅広い分野で多大な貢献をされています。これは北野 正剛学長をはじめとした歴代の役員・教職員の皆様が、長年にわたり質の高い教育の提供に取り組まれた功績によるものと深く敬意を表します。大分の地（知）の拠点である貴大学は、優秀な人材を輩出されており、教育学部では、地域の教員養成機能の中心的な役割を担い、入学から卒業までの一貫した指導体制等を通じて、質の高い教員を養成されています。経済学部は、複雑化・多様化する社会課題に果敢に挑戦し、社会の中核を支える人材を育成されるなど、卒業生の多くが大分を中心に全国で活躍されています。医学部は、地域医療に貢献する人材の育成を使命として、令和5年4月に「先進医療科学科」を新たに設置されるなど、最新の学術を教育・研究し、高度な専門知識と技術を備えた医師や看護師等を養成され、本市の地域医療に大きな役割を果たしていただいております。理工学部は、防災・減災分野など、地域や社会の課題解決に取り組まれるとともに、令和6年4月に「DX人材育成基盤プログラム」を設置されたほか、令和6年度入試から「女子枠」を設けられるなど、地域や社会のニーズに応じた人材育成を進められています。福祉健康科学部は、福祉課題の解決と福祉社会の実現をけん引できる専門職のリーダーを養成し、様々な困難を有する全世代の方々を包括的に支援する人材を輩出され、豊かな福祉社会の実現に貢献いただいております。

こうした時代の要請に応えた改革や職員・学

生の一体となった努力により、医師や保健師、看護師などの国家試験では全国平均を上回る高い合格率を達成されるとともに、教育学部における教員就職率及び正規教員就職率は、4年連続全国1位という素晴らしい成果を挙げておられます。

さて、本市は16世紀後半に国際貿易都市として繁栄し、西洋の医学や天文学、音楽、演劇をはじめとする南蛮文化がいち早く花開きました。そのような中、1557年にポルトガルの青年医師ルイス・デ・アルメイダが、豊後府内（大分）に日本最初の西洋式病院を建て、洋式外科手術を盛んに行ったことから、本市は「西洋医術発祥の地」でもあります。この病院には日本最初の医学校が併設され、若き日本人学生が先進的な西洋医学を学びました。

2025年はアルメイダ生誕500年です。現在もなお、この精神は生き続けており、貴大学におかれましては、宇宙空間での活用等が期待される竹由来の「セルロースナノファイバー」の開発や、胃がんの死亡率が高いブータンでの胃がん撲滅活動等による国際医療協力など、地域の発展や国際社会への貢献につながっているものと考えております。

今後も貴大学との連携をより一層深めながら、すべての市民が身体的、精神的、そして社会的にも満たされた「ウェルビーイング」な社会、誰もが“幸せ”を実感できるまちOITAの実現に向け、各種施策を推進してまいりますので、引き続きのご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、75周年を契機に、貴大学が今後ますます発展されますとともに、関係の皆様のご健勝、ご多幸を心からご祈念申し上げます。

大分大学 75 周年にあたって

前大分県知事
大分大学名誉博士

広瀬 勝貞



大分大学75周年をお慶び申し上げます。

大学は「知の拠点」と言われますが、大分県や県下の自治体にとっても研究教育は勿論、様々な学外活動等でも頼りになる先生あるいはパートナーとして助けて頂いています。その意味で2003年大分大学と大分医科大学が統合して総合大学機能が充実し、産学官連携が拡大したのもよかったと思います。

例えば、大分県と宮崎県には大学医学部があり、加えて血液・血管医療機器産業が集積しています。これをベースにして、両県に産学官連携して血液・血管医療の技術向上、機器開発、人材育成等の集積地を創ろうと、東九州メディカルヴァレー構想が始動しました。

工学部では、研究室の基礎研究を基にこれまで産学官連携して次世代電磁力応用技術、即ち画期的な強力かつ省電力モーターの開発が始まりました。

近頃デジタル化が「知」の世界を揺さぶっています。また地球温暖化がグローバルな不安要因となっています。こんな時代ですから、大分大学も「改革なきところ大学の未来はない」と意を決して知の拠点の構造的な組替えに取り組んでおられます。

一つは先進医療科学科の新設です。新型コロナ禍では、PCR検査技師が足りなくて困りました。PCR検査では、検体からDNAを抽出・増幅させたり、検査結果を読み取る必要がありますが、そんな技術を体系的に教える学科は医学部には有りませんでした。現代医学では、ゲノム、AI、ロボティクス、データサイエンス等の分野を活用した診断法、治療法の開発が進んでおり、それに対応できる人材の育成が急務です。新設される学科ではこの分野の学際を超えた総合的な教育が行われます。

第二は理工学部の改革です。工学部は2017年

に理工学部改組されたのですが、この分野も日進月歩で進化しつつあり、対する社会のニーズも急速に変化しています。理工学部では柔軟対応できるように1学科10プログラムに再編しました。具体的なプログラムとしては、先ずDX人材育成プログラムがあります。世は挙げてデジタル化が求められていますが、その最大のネックが人材不足です。大分大学は、国の要請も受けてこれに取り組むこととしています。半導体製造も人手不足が大問題です。ここでも大分大学は早速人材育成カリキュラムを構築して取り掛かっています。地域環境科学プログラムも注目です。最近はGXに取り組む自治体も増えており、そんなところの関心も高くなっています。

もう一つ。伝統の経済学部は長い間経済、経営の学科体制でしたが、これでは急速かつ複雑に動く今の経済は語れないと、1学科6コースに再編されました。経済分析・政策や会計のコースに加えて、社会イノベーション、生活・仕事創造、地域経営・法等興味津々のコースが設けられています。この再編で学部志願者が随分増えたと言いましたが、こんなテーマなら経済界等で働く一般の方々も聴きたいでしょうから、出張講演のお呼びも絶えないのでは？

人口減少が益々進み学生数が減ってくると、大学の統廃合や研究教育費の削減が論じられるかもしれません。しかし知の拠点はそんな時こそ一人ひとりの付加価値能力を高め、全体としての競争力を増強し、GDPを維持していくことが大事です。大分大学には、これからも改革を忘れずに時代の要請をしっかり受け止めて未来に向かって存分に活躍して頂きたいと思います。

大分大学 75 周年に寄せて

～地方総合大学としての発展を願う～

元文部科学事務次官

御手洗 康



平成15年10月、大分大学と大分医科大学が統合され、翌年4月からは国立大学法人大分大学となります。国の大きな大学政策の中で、総合大学としての新しい大分大学が生まれました。

私は、平成18年4月に第2代の羽野忠学長にお声をかけていただき、経営協議会の一員として平成29年まで10年ほど大分大学の改革の歩みを見てきました。国立大学法人法の制定に関わったものとして良い機会をいただき、大分大学を通して郷里に関わる仕事ができたと感謝しています。

率直に言って、当時の大分大学の状況は法人化の意義や課題、大学を取り巻く状況やこれからの大分大学に期待される役割、ましてや大学経営に関する問題意識は極めて遅れているとしか言えない状況でした。

平成23年10月に北野学長が就任して以降、大分大学の改革への機運が高まり、具体的な成果が見えるようになりました。平成28年4月に、教育福祉科学部を改組して福祉健康科学部と教育学部を設置、29年には工学部の理工学部への改組、経済学部の社会イノベーション学科の設置と続けました。その後の経緯はこの75周年記念誌で詳細に記録されていますが、令和3年には大分大学初の全国共同利用研究施設としてグローバル感染症研究センターが設置され、その後も医学部先進医療科学科の設置、理工学部と経済学部の1学科制への改組等、学生の教育ニーズや県民の期待に応える改革によって総合大学としての体制が整備されてきました。

このような大学の改革を推進するに当たり、法人としての経営組織の一体化と強力なリーダーシップが不可欠でした。平成26年に、北野学長のリーダーシップにより「大分大学のこれからの在り方検討懇談会」が設置されたことは特筆されるべきでしょう。これにより大分大学

のガバナンス改革が着手され、懇談会の答申を受けて学部長の選任と学長選考方法の改革が行われました。私個人としては、経営協議会委員の一人として参加した学長選考会議での審議が強く思い出として残っています。

学長選考方法の変更の最大のポイントは、教職員による意向投票の廃止と任期について再任の制限を撤廃したことです。意向投票については、多くの大学で行われているのになぜやめるのか、学内意見の反映はどうするのかという意見がありましたが、大分大学では学内の多様な関係者からの推薦を得て選考委員会が決定するというシンプルな方法をとったのです。再任の制限を設けなかったのは、後の世代を制約することなく、その時々で構成員が適任の学長を選べばよいと考えたからです。

現在、日本の社会は急激な人口減少に向かっています。地方が持続可能な地域としての活力を保持していくためには、自前の人材を育成し、地域の雇用と産業を確保し、生活環境を維持して行かなければなりません。地方では定員の確保ができない大学もありますが、そのために大学が果たさなければならない役割と大学への期待はますます大きくなります。

大分大学がこれからも大分県に基盤を置く国立大学として存在意義を持ち続けていくためには、先ず何よりも県民に支持され、愛される大学として発展していくことが不可欠です。そのためには未来を見据えるとともに、原点に立ち返って、例えば師範学校や高等商業学校の設立の動機と歴史に鑑みることも大事なことでないでしょうか。大分県の人材養成の中核的な機関として、大分大学が県内の高等教育機関の連携を一層深め、活力ある大分県の発展のために積極的にその役割を果たして行かれることを期待します。

羽ばたけ、グローバルに！

ANA ホールディングス（株）特別顧問

平子 裕志



本学が1949年の創立から75周年を迎えられましたことに心からお慶びを申し上げます。1970年代前半、中学生だった私は大分大学王子キャンパスの近くで暮らしました。当時ほどの学校も校舎や校庭に生徒が溢れ賑やかでした。高度成長期にあった日本、私の記憶に残っている懐かしいシーンのひとこまでです。半世紀が経ち世の中は一変しました。バブル崩壊後の日本は、失われた30年と形容されるべく、人口減少とデフレーションにより低成長時代に突入しました。最近ではデフレ懸念こそ薄れてきましたが、コロナ禍を経て少子化に拍車がかかっています。少子化は日本の産業・経済、文化・学芸などあらゆる分野の繁栄と、地域間の均衡ある発展に大きな影響を与えます。人新世という人類の活動が地球環境に大きな影響を及ぼす時代に入り、近年は経済的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさや幸福感など人類のウェルビーイングが意識されるようになりました。人口減少下でウェルビーイングを維持向上する、これは私たちに与えられた大きな課題です。課題解決には相応のイノベーションが必要です。大学を始めとする高等教育は多くのイノベーションを生み出してきました。そしてそれがあらゆる意味での「多様性」と深く関係しているのは歴史が証明しています。地域における高等教育の意義とアクセスという観点から、大学の研究と教育に求められる役割はますます重要になっていきます。

大分大学は2004年に国立大学法人になりました。その時に制定された大分大学憲章の前文には「大分の地がかつて異文化交流の国際的な先進地で、大分大学はこの進取の伝統を受け継ぎ更なる飛躍を期して、基本理念と目標を定め社会的使命を果たそうと決意した」とあります。ところがその後、運営費交付金の削減や基盤的

経費の高騰により、運営面で大変な努力を強いられました。このような状況下で、本学が北野学長のリーダーシップのもと「改革なき大学に明日はない」とのスローガンを掲げ、学部改組、大学院改組、研究組織等の設置、地域貢献など、矢継ぎ早に機能強化に取り組んできたことは特筆すべきことです。

物的資源の乏しい日本が将来も持続的に成長するためには、国民全体の知の総和の向上が不可欠です。人口減少下の日本においてそれは「一人当たりの知の総和の増加」を意味します。学部生・大学院生の皆さんの多くはいずれキャンパスを離れ、社会に出て職業を持つことになります。しかし、地球温暖化、デジタル技術やAIなどによって周りの環境がダイナミックに変化する時代、自分のパーパスやキャリアパスを達成するためには、継続的に高等教育に接する機会が必要になるでしょう。その上で、キャリアの多様化、地域のコミュニティ活動への参画など、自らのコンピタンスを発揮する機会を増やそうとすればなおさらです。それは一人当たりの知の総和の増大にも貢献します。まさに、本学の基本理念—豊かな創造性、社会性、人間性を備えた人材が地域と国際社会の発展に貢献し、人類福祉の向上と文化の創造に寄与する—を実践する時代の到来です。

私の父は1947年に大分経済専門学校に入学し、在学中に大分大学経済学部になりました。父は自伝の中で、同じ志の若者が集った上野ヶ丘の学舎は戦中のような学年・年齢による上下感はなく、切磋琢磨した人格者・教養者の集まりだったと記しています。75年を経た大分大学が75年後の2100年に向けて、地域にも世界にも大きく貢献するグローバルな大学として羽ばたくことを祈念いたします。

大分大学 75 周年を祝って

第2代 大分大学同窓会連合会会長

秦 政 博



敗戦による戦後の混乱がまだ収束しきれていなかった昭和24（1949）年、大分市駄原の大分師範学校・大分青年師範学校（現大分大学附属小・中学校の地）、上野丘の大分経済専門学校（現県立芸短大の地）が学制改革により、新制大分大学学芸学部・経済学部として発足しました。追憶になりますが、昭和36（1961）年駄原の学芸学部に入學、元陸軍歩兵第47連隊の兵舎跡を使った貧しい環境の中で、宏博な知見を求めて過ごした4年間は、今も脳裏を離れることはありません。

昭和41（1966）年学芸学部が教育学部へ名称変更した3年後、昭和44（1969）年現在地の旦野原に学芸・経済の両学部が統合移転して母校の様態は一新。旦野原の地は青春の気に満ちた新生の場になりました。その後工学部（現理工学部）の設置、大分医科大学（現医学部）の統合、また教育学部を改組して教育福祉科学部、その後しばらくして福祉健康科学部の設置により教育学部の旧称に戻るなど様々な変遷をたどり、また平成16（2004）年の国立大学の法人化によって、大学経営の新体制が開始されました。こうした歩みのそれぞれは、言うまでもなく母校の伸長・発展の脈絡であり、国の教育施策のなか社会の様々な変容を敏感に受け止め、その要請を的確にくみ取りながら、地域社会の課題解決に能動的に応えるべく、鋭意改革を進めてきた足跡に他なりません。

的確な時代感覚を持って産学官を結び、大分の「地域の知的センター」として、地域はもとより広範にその実力を発揮し成果を具現してきたことは、衆人の認めるところかと思います。言うまでもなく大学は地域社会と風馬牛であるはずはなく、一には知的な財産を生み出して社会へ還元すること、二には社会をリードする有

能な人材を送り出すことにあると思います。

75年に亘り数多の有能な人士を送り出してきた母校ですが、5学部の現在、総勢約5,400名に及ぶ若者が毎年春その懷を巣立ち、それぞれの学部において同窓の輪が拡大しています。5学部1研究科の7同窓会をもって構成する「大分大学同窓会連合会」は、「会員間の交流、連携を推進し、卒業生等の交流・親睦を図り、母校の発展に寄与する」ことを主たる目的にしています。好學の志を抱いて学芸の探究にいそしみ、青春の熱情を湧き立たせた同窓同士、懐かしい旧事を思い起こしながら、寛闊な度量をもって母校への協力・支援に向かいたく、75周年を機会に心から願うところです。

「多きをもって一となす」と言う謂がありますが、豊友会(1万1,300人)・四極会(1万1,543人)・玉樹会(4,216人)・桜樹会(1,912人)・翔工会(1万5,300人)・福蓮会(500人)・九峰会(120人)【人数は令和6（2024）年8月1日時点】は、まさに一体となって母校を支える連合体です。出身学部等は異なりますが、これを機にそれぞれが各種・各様の形で母校に思いを馳せていただきますよう、最後になりましたが母校が地域はもとより、内外に向けての「知の一大センター」としてさらに飛翔することを、心より祈念しながら祝詞といたします。

目 次

■学 長 挨 拶

■ご 寄 稿

第1部 通 史 編

第1章 大分大学の誕生

第1節	教育学部の前身	2
第2節	経済学部の前身	2
第3節	大分大学の開学・移転	3
第4節	大分医科大学の開学	4

第2章 大学改革

第1節	大分大学と大分医科大学の統合	6
第2節	国立大学の法人化	7
第3節	法人化後の大学改革	10

第3章 教職員の福利施設

第1節	職員宿舎	16
第2節	別府職員会館	16
第3節	東院会館	17

第4章 学生生活

第1節	入学料・授業料・奨学金	18
第2節	課外活動	19
第3節	学生の福利厚生施設	21

第5章 地域貢献・社会貢献

第1節	公開講座・公開授業	27
第2節	開放イベント	29
第3節	共同研究・受託研究	30
第4節	国際交流	31

第6章	将来構想	33
-----	------	----

第2部 部局史編

第1章 教育学部

第1節	教育学部長挨拶	38
第2節	教育学部のあゆみ	39
第3節	教育・研究	41
第4節	大学院教育学研究科	51
第5節	附属学校園のあゆみ	53
第6節	将来展望	59
第7節	教育学部教員の回顧談	60
第8節	教育学部卒業生の回顧談	63

第2章 経済学部

第1節	経済学部長挨拶	66
第2節	経済学部のあゆみ	67
第3節	教育・研究	68
第4節	大学院経済学研究科	79
第5節	将来展望	84
第6節	経済学部教員の回顧談	86
第7節	経済学部卒業生の回顧談	89

第3章 医学部

第1節	医学部長挨拶	92
第2節	医学部のあゆみ	93
第3節	教育・研究	101
第4節	研究科	117
第5節	医学部附属病院	118
第6節	将来展望	129
第7節	医学部教員の回顧談	130
第8節	医学部卒業生の回顧談	133

第4章 理工学部

第1節	理工学部長挨拶	136
第2節	工学部・理工学部・大学院工学研究科のあゆみ	137

第3節	教育・研究	155
第4節	工学研究科博士後期課程の変遷	174
第5節	将来展望	175
第6節	工学部教員の回顧談	176
第7節	工学部卒業生の回顧談	179

第5章 福祉健康科学部

第1節	福祉健康科学部長挨拶	182
第2節	福祉健康科学部のあゆみ	183
第3節	教育・研究	186
第4節	研究科	188
第5節	将来展望	190
第6節	福祉健康科学部教員の回顧談	192
第7節	福祉健康科学部卒業生の回顧談	195

第6章 グローカル感染症研究センター

第1節	センター長挨拶	198
第2節	沿革	198
第3節	現況	198
第4節	将来構想	200

第7章 教育マネジメント機構

第1節	機構長挨拶	201
第2節	沿革	202
第3節	現況	202

第8章 研究マネジメント機構

第1節	機構長挨拶	206
第2節	沿革	206
第3節	現況	207

第9章 クライシスマネジメント機構

第1節	機構長挨拶	210
-----	-------	-----

第2節	沿革	210
第3節	現況	210
第4節	将来構想	211

第10章 学術情報拠点

第1節	拠点長挨拶	212
第2節	沿革	213
第3節	現況と将来展望	216
第4節	学術情報拠点の回顧談	221

第11章 地域連携プラットフォーム推進機構

第1節	機構長挨拶	222
第2節	沿革	222
第3節	現況	222

第12章 減災・復興デザイン教育研究センター

第1節	センター長挨拶	223
第2節	沿革	223
第3節	現況	224
第4節	将来構想	224

第13章 保健管理センター

第1節	所長挨拶	225
第2節	沿革	225
第3節	現況	226
第4節	将来構想	228

第14章 I Rセンター

第1節	センター長挨拶	229
第2節	沿革	229
第3節	現況	229
第4節	将来構想	229

第15章 ダイバーシティ推進本部

第1節 本部長挨拶	230
第2節 沿革	230
第3節 現況	230

第3部 資料編 (2024(令和6)年5月1日現在)

1. 沿革図	234
2. 略年表	236
3. 組織図	240
4. 歴代役職員	242
5. 歴代学部長等	266
6. 教員一覧	278
7. 名誉教授	282
8. 同窓会	287
9. 学生入学定員の推移	290
10. 外国人留学生数推移	294
11. 卒業生数推移	295
12. 国際交流協定機関	296
13. 包括協力・連携・協力協定	299
14. 主な外部資金等受入実績	300
15. 建物配置図	303
16. 執筆者一覧	309
17. 主要参考資料	313
18. 大分大学75年史編纂委員会委員名簿	314
19. 編集後記	315

凡 例

1. 本書は、1949(昭和24)年5月31日に発足した大分大学の75年の歩みを通史編・部局史編・資料編の3部構成でまとめたものである。
2. 記述は、大分大学50年史以降の1999(平成11)年5月から75周年に当たる2024(令和6)年5月までを中心に記載している。50年史までの歴史については、簡潔にまとめて記載している。
3. 学部長、センター長等の挨拶文については、2024(令和6)年5月1日現在の長としている。
4. 資料編は、2024(令和6)年5月1日現在で作成している。